昔の若者、今のベテラン
― 地質調査の技術を次の世代へつなぐ ―

常磐地下工業株式会社
代表取締役社長　伊藤　康博

地質調査業界に携わっていると、近年特に強く感じることがある。
それは、技術者の高齢化と若手技術者の不足である。
少子高齢化が進む現在、この問題そのものを避けることは難しい。今後、若い人材が急激に増えることを期待するだけでは、技術の継承は進まないだろう。
では、私たちはどうすればよいのか。
この問題を考えるとき、現場や職場でよく耳にする言葉がある。

「今の若者は仕事を覚えようとしない」
「我々が若かった頃は、もっと一生懸命だった」
「昔は誰も教えてくれなかった」
「最近の若い人は根気がない」

確かに、私たちが若かった頃と今では、仕事に対する考え方も、働き方に対する価値観も大きく変わった。
昔は「早く一人前になりたい」「先輩に追いつきたい」という思いを前面に出し、多少つらいことがあっても、前を向いて仕事を覚えることが当たり前だったように思う。
しかし、ここで一つ忘れてはならないことがある。

昔の若者とは、今のベテランである。

私たちも、初めから仕事ができたわけではない。若い頃には分からないことがあり、失敗もした。地層の変化を見落としたこともあっただろう。機械の扱いに戸惑ったこともあっただろう。調査結果の意味が十分に理解できず、報告書を何度も修正された経験を持つ人も多いはずである。
それでも、誰かが仕事を教え、ときには叱り、ときには待ち、技術を伝えてくれたからこそ、今の私たちがいる。
その私たちが、今では「教える側」に立っている。
そう考えると、「今の若者は」という一言だけで若手を評価してしまうことに、私は少し違和感を覚える。
若手は本当に仕事を覚えようとしていないのだろうか。現場を見ていれば、必ずしもそうではない。暑い日も寒い日も現場に立ち、泥や水にまみれながら資機材を扱い、先輩の作業を見ながら少しでも仕事を覚えようとしている若手がいる。

内業でも同じである。

柱状図を確認し、N 値や室内試験結果を整理し、地形・地質資料や過去の報告書を読みながら、何とか一つの報告書をまとめようと努力している若手がいる。

ただし、当然ながら経験は少ない。

30 年、40 年と地質調査に携わってきた技術者と、入社して数年の技術者とでは、判断力に差があるのは当然である。

地質調査の技術とは、単にボーリング機械を操作できることだけではない。掘削音や機械の振動、給圧、送水、スライムの状態、ロッドから伝わる感触などから、地中の状態を感じ取る技術がある。また、調査によって得られたデータを読み解く技術もある。

柱状図、N 値、地下水位、室内試験結果、地形・地質条件、周辺の既往資料などを総合し、地盤構成を判断する。どの層を支持層として評価するのか。軟弱層をどのように考えるのか。液状化や沈下について何を検討すべきなのか。基礎や地盤改良を考える上で、設計者や発注者に何を伝えるべきなのか。

そして、それらを調査報告書として整理し、第三者に分かる形で伝える。これもまた、地質調査技術者に求められる大切な技術である。

長年仕事を続けてきたベテラン技術者は、こうした判断をほとんど無意識に行っていることがある。

だからこそ、若手に対して、

「これくらい見れば分かるだろう」

「そんなことも知らないのか」

「報告書を読めば分かる」

と言ってしまうことがある。

しかし、若手にはその「当たり前」がまだない。例えば、若手が作成した報告書をベテランが修正するとする。文章を赤字で直して返すだけなら、若手は「ここを直された」ということは分かる。しかし、

なぜ、その文章ではいけなかったのか。

なぜ、その地盤評価では不足していたのか。

なぜ、その結論に至るのか。

そこまで伝えなければ、本当の意味で技術を教えたことにはならない。地質調査において継承すべきものは、完成した報告書の文章そのものではなく、**その結論に至るまでの考え方である。**

現場についても同じである。

「この地層ではこう掘れ」と指示するだけではなく、なぜその掘り方をするのか。

「ここで掘り止めろ」と言うだけではなく、何を見て、何を考えてその判断をしたのか。

そうした「なぜ」を言葉にして伝えることが、技術継承には欠かせない。

私たちベテラン技術者の中には、非常に高い技術を持つ人がいる。

難しい孔内トラブルにも対応できる。

地盤の状態を的確に読み取ることができる。

複雑な地盤条件から適切な考察を導き、報告書としてまとめることができる。

その技術は誇るべきものである。しかし、私はここで、あえて問いかけたい。

その卓越した技術を、自分だけのものにして終わってよいのだろうか。

「自分ならできる」

「自分には分かる」

「長年やってきたから判断できる」

それだけでは、技術は自分の代で終わってしまう。本当に優れた技術者とは、自分だけが難しい仕事をこなせる人ではなく、**自分が身につけた技術を、次の世代へ渡すことができる人**ではないだろうか。

もちろん、若手側にも努力は必要である。何でも教えてもらえると思ってはいけない。分からないことを自分で調べ、先輩の仕事を観察し、質問し、自分なりに考える。失敗を恐れず、少しずつでも前へ進む姿勢は必要である。

しかし、若手に「もっと前を向け」と言う前に、私たち自身も考える必要がある。

若手が前を向ける環境を、我々はつくれているだろうか。

質問した若手に「そんなことも分からないのか」と言っていないだろうか。失敗した若手に、その理由を教える前に能力そのものを否定していないだろうか。自分の経験を語ることが、いつの間にか自慢話になってはいないだろうか。

そして、「今の若者は」という言葉で、若手を理解しようとすることを止めてはいないだろうか。

私たちが 30 年かけて身につけた技術を、次の世代も同じ 30 年をかけなければ身につけられないのであれば、それは本当に技術を継承したと言えるのだろうか。

自分たちの経験や失敗を伝え、若手が 10 年、あるいはそれより短い期間で同じところまで到達できるようにする。そして、いつか自分を超える技術者になってもらう。それこそが、技術を持つ者の役割ではないかと思う。今のベテランも、かつては「昔の若者」だった。そして、今の若者も、やがてこの業界を支えるベテランになる。そのとき彼らが、さらに次の世代へ、「地質調査という仕事は面白い」、「この技術を次へ残していきたい」と言える技術者になっているかどうか。

その未来をつくる責任は、今の私たちにある。

「今の若者は」と嘆く前に、

「今の若者に、私たちは何を残せるのか」

を考えたい。

地質調査という仕事は、そもそも目に見えない地盤を相手にしている。そして、技術者が長年培ってきた経験や勘、判断の根拠、人を育てようとする思いもまた、形として目に見えるものではない。

大切なことは、決して目に触れるものではない。

だからこそ、それを言葉にし、態度にし、次の世代へ伝えていかなければならない。

現場で培った技術も、地盤を読み解く力も、報告書をまとめる力も、人から人へ渡して初めて生きた技術になる。

自分にしかできない仕事を誇ることから、自分がいなくても次の世代が判断できるようにすることへ。

それが、これからの地質調査業界に求められる、本当の意味での技術継承なのではないだろうか。

